

●ウイスキー・ラベル物語-14

植民地で再生されたアメリカン・ウイスキー(4)
—禁酒法が世界のウイスキー市場を変えた—

か 河 かい 合 だし 忠
Tadashi KAWAI



西部劇の舞台となったサロンやバー

多くの日本人がテレビ番組、水戸黄門シリーズを飽きずに見続けるのと同じように、アメリカ開拓時代を代表する西部劇もアメリカで繰り返し放映されている。ジョン・ウエイン (John Wayne, 1907～1979, 実名 Marion Morrison) など多くの古い西部劇俳優がこの世を去って、その人気は衰えているとはいえ、相変わらず多くのアメリカ人のファンが西部劇を楽しんでいる。その中で、派手なガン・ファイティングの舞台となるのは、決まって町の中心にあるサロンやバーである。サロン (salon) というのは、フランスの17, 8世紀にパリの上流婦人社会で流行した文士・画家などとの交流に使われた客間で、「憩いの場」を意味した。それが、英語では saloon と綴られ、そのままかまたは saloon bar などとして、酒場の意味でも使われるようになった。

小さな酒場はバー (bar) と呼ばれているが、その語源について真偽のほどは分からないが、次のようなもっともらしい説がある。バーとはもともと、棒、門のかんぬきなどの横木、さらに進路を遮る障害物などを意味する言葉である。開拓時代のアメリカでは多くの家庭で自前の蒸留酒を造り、居酒屋では決まって蒸留酒を販売するのが慣わしで、リンカーン大統領やジャック・ダニエル家庭も同様であった。しかし、酔った客が蒸留酒の大きな貯蔵瓶から勝手に酌みだして飲むようになったことから、瓶の置き場の周囲に棒の囲いを作ったという。それが小さな酒場の代名詞となって、いつかバーと呼ばれるようになり、さらにカウンターを作って酔客の

無謀な侵入を防ぎ、カウンター越しのサービスが定着してカウンター・バーとも言われるようになった。

開拓史の荒くれ男たちの「憩いの場」はもっぱらサロンで、酒に酔って話に興じ、時に派手な殴り合いが日常生活の楽しみでもあった。1ドル銀貨をカウンターに叩きつけ、ウイスキーをストレイトでグイと一気に飲み干す姿がいつも画面を飾る。さらに、美人で派手な女流歌手がいれば最高に盛り上がる。ヨーロッパ大陸から新世界を目指した多くの移民は、ウイスキーの造り方を持ち込み、ウイスキーで日頃の疲れと鬱憤を晴らしたのであろうか。ウイスキーの造り方でも工夫されて独特のアメリカン・ウイスキーを生み、年毎にウイスキーを“呷る”習慣が進み、やがてアルコール中毒患者が年々増加して、大きな社会的、政治的問題に発展する。



アルコール中毒が社会を破壊

このシリーズの冒頭で、「酒は百薬の長」といい、ウイスキーはゲール語の「生命の水」に由来すると紹介したが、それは適量の飲酒の効用であって、飲み過ぎはさまざまな健康障害の元となることは周知の事実である。それでも、長い人類の歴史の中で、アルコールの魔力から抜け出せない多くの人たちがアルコール中毒の犠牲となってきたし、今後とも未来永劫その犠牲者は続くであろう。急性アルコール中毒は一度に多量のアルコールを飲むときに見られ、特に、アルコール度の高い蒸留酒をストレイトで“ぐいぐい”飲むカウボーイ・スタイルは危険である。血中アルコール濃度が0.1%以下ならばほろ酔い気分、0.15%程度になると酔い状態とな

り、0.3%程度になると明らかな酔っ払いで麻痺状態となり部分的に意識喪失を来し、さらに0.5%以上では完全な泥酔状態、0.6%以上になると生命に危険を及ぼす。とはいっても、それらの閾値は個人差が大きく、日本人は欧米人よりも「酒に弱い」人が多く、その背景には、アルデヒド脱水素酵素の働きが弱い人が50%程度存在することによるとされている。摂取されたアルコールは胃腸管、特に空腸から急速に吸収されて肝細胞で代謝されるが、まずアルコール脱水素酵素でアセトアルデヒドに分解され、アセトアルデヒドは強い毒性物質であるから速やかにアルデヒド脱水素酵素により酢酸に分解され、クエン酸回路に入ってエネルギーを産生しながら二酸化炭素と水にまで分解される。アルデヒド脱水素酵素活性が低い人では、アセトアルデヒドが蓄積して気分が悪くなるためにほとんど酒を飲めないことになる。しかし、「酒に強い人」は多量に飲み続け、急性アルコール中毒で路上に倒れることは少ないが、慢性アルコール中毒になる頻度が高くなる。その傾向は男性よりも女性に多く、女性を取り巻く生活環境もあって、キッチン・ドリンカーとなりやすい。アメリカ南北戦争を描いた米国名画の代表作「Gone With the Wind (風と共に去りぬ)」(1939年作、ビクター・フレミング監督)の中でビビアン・リー (Vivien Leigh, 1913 ~ 1967, 実名 Vivian Mar Hartley, 写真1) が演ずるスカーレット・オハラ (Scarlett O' Hara) こそ、まさにその象徴である。南北戦争のため夫と別れて故郷に帰ったスカーレットは、キッチンでバーボンをがぶ飲みし、その口臭を消すために香水でうがいをするシーンなどは未だに記憶に新しい。

慢性アルコール中毒では、習慣的に多量のアルコール摂取を続けることによって、アルコール性肝障害にはじまってさまざまな身体症状を示すとともに、神経炎や精神障害などに悩まされ、最後は廃人状態にまで至る。特に精神障害では、譫妄、幻覚などに襲われ、家庭を破壊し、犯罪を犯すこともあり、社会的に大きな問題となる。



世界的に広がった節酒・禁酒運動

ウイスキーの里、アイルランド、スコットランドでも古くから、心ある人々によって節酒運動



写真1 女優のビビアン・リー (Vivien Leigh)

アメリカ南北戦争を舞台にした映画「風と共に去りぬ」の中で、アル中のスカーレットを演じてハリウッドのアカデミー賞の主演女優賞を得た。1913年にイギリスで生まれ、1940年にイギリスの有名な舞台俳優兼演出家のローレンス・オリビエ (Laurence Olivier) と結婚して、大きな話題となった。

(temperance) が起こったことはもちろんであるが、カナダを含めてアメリカ大陸にも広がった。しかし、政治家を巻き込んで最も大きな盛り上がりを見せたのはアメリカである。開拓時代から南北戦争に至ってウイスキーの消費傾向が大きくなり、しかも庶民から有識者、政治家にまで昼、夜を通じて飲酒傾向が広まっていったアメリカでは大きな社会問題に発展した。遂に1920年1月17日午前0時をもって合衆国として禁酒法が発効したのである。

日本では禁酒運動が早くから行われていたが、法律で規定したのは、1922年(大正11年)3月30日に制定された「未成年者飲酒禁止法(法律第20号)」が初めてである。すなわち、第1条で「満20年ニ至ラサル者ハ酒類ヲ飲用スルコトヲ得ス」と規定し、現在も生きている。第二次世界大戦以後25歳まで飲酒を禁ずる法案が議会で提出されたことはあるが、成立に至らなかった。



禁酒時代を生む時代的背景

米国では、ウイスキーの製造、運搬、販売を禁止した禁酒法が発効した1920~1933年までの14年間を Prohibition (禁酒時代) と呼ばれており、米国内はもとより、世界中のウイスキー産業と市場に大きな影響をもたらした。

独立戦争を英国から勝ち取った米国では、18世紀末にケンタッキーでのウイスキーの生産が本格的に始まり、19世紀に入ってその消費量は急速に拡大していった。こうした時代的背景をもって、アル

コール中毒が深刻な社会問題となり、一部の市民がその予防と救済のために立ち上がり、しかも一部の政治団体と組んで大きな盛り上がりを見せたのが米国での禁酒活動の特徴である。

禁酒法の成立には長い間の禁酒賛成論者 (prohibitionists) による市民活動が基礎になり、いくつかの政治団体が支援して全米に大きな盛り上がりを見せた。1830年代に米国だけではなく、アイルランド、スコットランド、そして北イングランドにも広がりを見せた節酒運動 (temperance movement) を推進したのは節酒運動団体であったが、米国では自由党 (Liberal Party) の支援を受けて禁酒法の制定に激しい活動を続けた。それに類似した団体としてはサロン反対同盟 (Anti-Salon League) があり、同様に幅広い禁酒運動を展開した。その他に、禁酒運動を支援した政党としては、ポピュリスト政党 (Populists) や進歩主義政党であった。ポピュリスト政党は、工業化による農業低迷からの脱却を目指した農民運動 (populism) に支えられて1892年に創設され、数回にわたって大統領選挙に候補者を擁立したが、結局工業化を阻止できずに解散した。また、進歩主義者 (progressives) によって進歩主義政党 (Progressivism) が結成され、合衆国や州の政策にいろいろな改革を実現させたが、同時に禁酒運動も支援した。こうした市民運動と政党とが結びつき、全米に広がった。

ケンタッキーの酒類販売店の子として生まれ、酒類販売から身を興こし、独学で弁護士資格を取ったアブラハム・リンカーンが政治家となって実績を挙げるについては、禁酒を叫ぶ大衆運動を無視できず、禁酒政策については終始曖昧な態度をとりつづけたが、合衆国形態を維持することを最大公約に掲げて共和党 (Republicans) を創設し、遂に1860年にアメリカ合衆国大統領に上りつめた。しかし、リンカーン大統領就任以前の1850年頃からすでに一部の州で禁酒法が施行されはじめていた。すなわち、最初にアメリカ合衆国で禁酒法を施行した州はメイン州で1851年、カンザス州1880年、北ダコタ州1889年、オクラホマ州1907年、ジョージア州1908年、ミシシッピ州・北カロライナ州・テネシー州1909年と続いた。リンカーン大統領率いる北軍の総司令官グラント将軍は大のウイスキー党で、後に大統領に就任するなど、ウイスキー愛好家も根強

い勢力を維持している中では連邦議会への禁酒法案提出は日の目を見ないままとなっていた。



禁酒運動の旗頭となったネーション婦人

ウェブスター百科辞典 (Webster's New World Encyclopedia) にも名を連ねる1人の婦人禁酒運動家があった。彼女の名は、Carrie Amelia Moore Nation (1846～1911) で、禁酒運動華やかな頃に生き、禁酒法制定を目前にして、この世を去った。彼女はケンタッキー生まれで、ミズリーで短期間教員を務めたが、アルコール中毒の夫の Charles Gloyd 博士の死後、禁酒運動に身を投じた。カンサス州に移住し、David Nation と再婚したが、アメリカ・インディアンが使った手斧を振りかざして、カンサス州の禁酒法を無視した闇のサロンやバーに押しかけ、ウイスキーの瓶やバーの建物などを破壊して回った (写真2)。また、自ら「Smasher's Mail (破壊者の手紙)」を出版して、禁酒運動を啓蒙したことで全米に知られるようになった。



禁酒法制定の引き金になった第一次世界大戦

前述のような相拮抗する政治社会の中で、禁酒法制定の引き金になったのは、まさに第一次世界大戦の勃発であった。1914年、ドイツ、オーストリア・ハンガリーなどの中央ヨーロッパの大国と英国・フ



写真2 手斧を振りかざし、闇のバーを破壊した禁酒主義者のキャリー・ネーション夫人 (Mrs. Carrie Nation)

ケンタッキーで生まれ、アル中の夫の死後、禁酒運動に身を投じ、禁酒法を施行していたカンザス州に移り住み、デービッド・ネーションと再婚して禁酒運動家として有名をはせた。

ランス・ロシア連合軍との間に始まったヨーロッパを二分する戦争であって、1918年までの5年間続いた。途中、ロシア革命のために1917年にロシアが戦争から撤退し、同年米国が英仏連合軍を応援して参戦した。そこで、米国では、戦時法案として1917年に禁酒法案が下院に提出され、1919年1月16日に同法案はアメリカ連邦議会を通過した。皮肉にも、法案が議会に提出された翌年に第一次世界大戦は実質的に終息し、1919年ベルサイユ平和条約の締結によって完全に終わった。かくして“天下に類を見ない悪法”といわれている禁酒法は1920年1月17日午前0時をもって発効し、米国内でのウイスキーの製造、運搬、販売は禁止されたのである。これによって、正規のルートを通じた外国からのウイスキー輸入も完全に止まり、アイルランド、スコットランドのウイスキー産業は大打撃を受け、第一次世界大戦後の経済不況も重なって、特にアイルランドのウイスキー産業は回復不能な低迷を続ける運命をたどったのである。米国内のウイスキー産業も大きく停滞したことは言うまでもない。しかし、薬用酒という名目で、7つのウイスキー蒸留所がウイスキー生産を許されたが、政府の厳重な監視の下での生産であり、すべての薬用酒ボトルには緑色の証紙を貼って出荷された（写真3）。皮肉にも、アメリカの禁酒法の施行によって、目覚ましい発展を遂げたのはカナダのウイスキー業界のみであった（後述）。



写真3 禁酒時代に販売された薬用酒ウイスキーのオールド・テイラー（Old Taylor）

ストレート・ケンタッキー・ウイスキー（Bottled in Bond）で、瓶の中央右端とキャップに証紙が貼られて封印されている。



天下の悪法は14年間で廃止

禁酒法が施行された後は、ウイスキーの密造や密輸が急増した。アルコール度の高い質の悪いウイスキーを密造し、それをアイリッシュと偽称して売りさばく悪徳業者が増え、禁酒法施行後わずか2年にして法律施行前の生産量に達したという。

密輸の主なルートはカナダからで、アイリッシュ・ウイスキー業界が急速に低迷に落ち込まれたのとは対照的に、皮肉にもカナダのウイスキー業界は量・質共に飛躍の成長を遂げた。米国とカナダの両国にまたがる水の交通路としてミシガン湖（Lake Michigan）とデトロイト川（Detroit river）の2つがあった。大きなミシガン湖を通過して、警察の監視網を縫って昼夜を問わず密輸船がシカゴにウイスキーを大量に持ち込んだ。また、カナダ領のヒューロン湖（Lake Huron）と米国領のエリー湖（Lake Erie）の間のエリー運河とデトロイト川を通して、闇夜に乗じて大量のウイスキーがデトロイト市に運び込まれた。こうした密輸に絡んで暗躍したのがアル・カポネなどの暴力団で、激しい勢力争いを演じたことは、映画「ゴッド・ファーザー」でもよく知られている。

禁酒法施行後も、密かにウイスキーを飲ませる店



写真4 女優のマリリン・モンロー（Marilyn Monroe）

美しいブロンドの髪と肉厚のセクシーな唇、そしてお尻を揺らす独特のモンロー・ウォークで見る人を魅了した、1950年代のセクシー女優の代表として活躍した。2番目の夫は有名な野球選手ジョー・ディマジオ（Joe DiMaggio）、3番目の夫は「セールスマンの死」で有名になった脚本家のアーサー・ミラー（Arthur Miller）。ミラーが1960年彼女のために書いた「The Misfits」は、彼女が出演した最後の映画となった。翌1962年、寝室のベッドで死体となって発見され、日本人のロスアンゼルス郡主任検死官・野口博士によって睡眠薬による自殺とされた。筆者が日本に帰国する寸前の出来事であった。

があとを絶たず、1932年頃にはニューヨークだけでも22万軒を超えたといわれている。もちろん、公然とウイスキーを飲ませたわけではないが、禁酒法は文字通り「ザル法律」と化していたのである。1959年にビリー・ワイルダー (Billy Wilder) 監督映画「Some Like It Hot (お熱いのがお好き)」の中で、マリリン・モンロー (Marilyn Monroe, 1926～1962, 実名 Norma Jean Mortenson or Baker, 写真4) が演ずるバンド歌手がお客の前で太股の間に隠していたウイスキー入りの水筒を取り出すセクシーなシーンは、今でもモンロー・ファンの間で語り草になっている。こうして、禁酒主義者のネーション夫人などの激しい市民活動や政治活動にもかかわらず、アメリカ人の飲酒傾向は禁酒法の施行によってさらに煽られて、市民の楽しみの主流はティー・パーティーからドリンク・パーティーへと変わり、一層ウイスキーを好むようになった。悪質のウイスキー

が出回ったこともあり、アルコール中毒者は急激に増加していった。1927年にはニューヨークだけでもアル中による死亡者は719人を数え、禁酒法施行前の約3倍にも増加したという。

1933年、遂に天下の悪法といわれた禁酒法は廃止された。ルーズベルト大統領の時代に憲法修法第21条によって1933年12月5日をもって、14年間の禁酒時代に幕が降ろされたのである。同時に、1934年から新しい酒税法が施行され、「蒸留酒の規格に関する規則」を設けて販売されるウイスキーの質を規定したのである。かくして、カナダ、イギリス、日本から大量のウイスキーが正規に輸入されるとともに、国内でのウイスキー生産に対してはバーボンの規格を定めて業界の育成に乗り出した。まさに、新しいアメリカン・ウイスキーの再興が始まった。